専門教育科目　心理学調査法

授業公開報告書

教育心理学教室・富田英司

＜授業の枠組み：シラバスから＞
担当者：富田英司
科目名：心理学調査法（受講者：３回生 10 名，教育心理学専修専門科目・必修）
日時：12 月 2 日(火) ３・４時限
場所：１号館３ 階教育心理学共同実験室１
指定参加者：相模健人
カンファレンス：授業終了後 18 時から 19 時まで
授業者以外の参加者：渡邊弘純，相模健人
カンファレンスの参加者：渡邊弘純，相模健人，富田英司

＜授業の枠組み：シラバスから＞
授業の目的　教育心理学に関連した調査に関する基本的知識と具体的な手法を獲得する。
授業の到達目標　（１）調査法を用いた研究の計画，質問紙の設計/作成/実施/入力/初歩的なデータ分析が出来るようになること。（２）マイクロソフト・エクセルを用いてデータの入力／管理がおこなえること。（３）統計パッケージを用いて，グラフの描画，相関係数の算出，重回帰分析，因子分析を行い，その分析の結果を論文に記述することができること。（４）オンライン上で協同作業をすすめるための ICT リテラシーを身につけること。（５）協同で仕事を進めるために必要な集団作業のマナーを身につけること。
授業概要　各種の実習を通して，質問紙による調査の理論と方法を学ぶ。

＜本時の内容＞
本時は，１４回目の授業であった。これまで３つの班に分かれて，それぞれのテーマについて実際に質問紙調査を企画し，研究計画を立て，配布・回収し，分析を進めてきた。この成果を発表する時間として本時が設けられた。
各班毎に 20 分程度プレゼンテーションをおこない，その後，受講生，授業者，授業参観者を織り交ぜての質疑応答の時間とした。プレゼンテーションは，パワーポイントと印刷資料を用いて行われた。質疑応答の後，授業者が必要な説明の補足と理解確認のための質問をいくつか行った。これらの質疑への対応や他班への積極的な質問も評価の対象であることが授業の初めに受講者に伝えられた。

＜カンファレンス参加者のコメント＞
- 渡邊弘純：発表者が自分たちで企画した研究について，自分たちの言葉で説明できたいた点がよかった。分析方法などについては，いくつか未熟な点は見られたが，その点については今後改善していくものと考えている。
- 相模健人：これまで授業で積み重ねてきたことや学生のプレゼンテーションの質については高く評価できる。各グループの発表後，質疑応答の時間があったが，そこで学生同士の議論がうまく展開しないときには教師が介入したほうが良かったと思われる。

＜授業者の感想＞

・ 各グループのプレゼンテーションのあと，学生同士のやりとりで一部うまく意見が伝わらない場面があった。授業者としては，この「伝わらなさ」自体が学習者にとって，さらに議論力を高めたいという動機付けに繋がると考えている。そのため，学生の発言に積極的に足場作りを行うことは最小限に留めた。

・ 各班とも，いろいろと理解の不十分な点や準備不足の点も散見されたが，自分たちで企画した問題として，積極的に取り組んでいた点を評価している。また，普段はあまり積極的に行動していないが，質疑応答のときには率先して議論に参加する学生も見られ，学生の多様な側面を評価することに繋がった。

＜授業公開後の展開＞

・本授業が行われた次の週の最終授業では，統計に関するテストとその解説を行った後，授業に関するアンケートを行った。アンケートの主要な内容は，「楽しさ」「充実度」「困難度」に関する５段階の評定であった。この評定は，今回のプロジェクト法による授業内容の各フェイズについて行われた。図１の下部に示したように「テーマ構想」から「プレゼンテーション」まで，９つのフェイズについて評定を行った。

図１から読み取れることは，まず最初の構想を練る段階は受講生にとって難しいことであるけれども楽しく，充実していることが分かる。この後，文献調査において楽しさと充実度が全期間中で最も下がった。質問を作成する段階になると評価は再度上がった後，困難度だけが下がっていく。困難度のピークはデータ分析であるが，困難度や楽しさは文献調査ほど下がらない。最後，プレゼンテーションがあることで充実度が上がることが分かる。

楽しさ，充実度，困難度が全て低い文献調査のフェイズについては改善が必要であろう。また，プレゼンテーションが充実度を底上げする効果をもつことが示唆された。

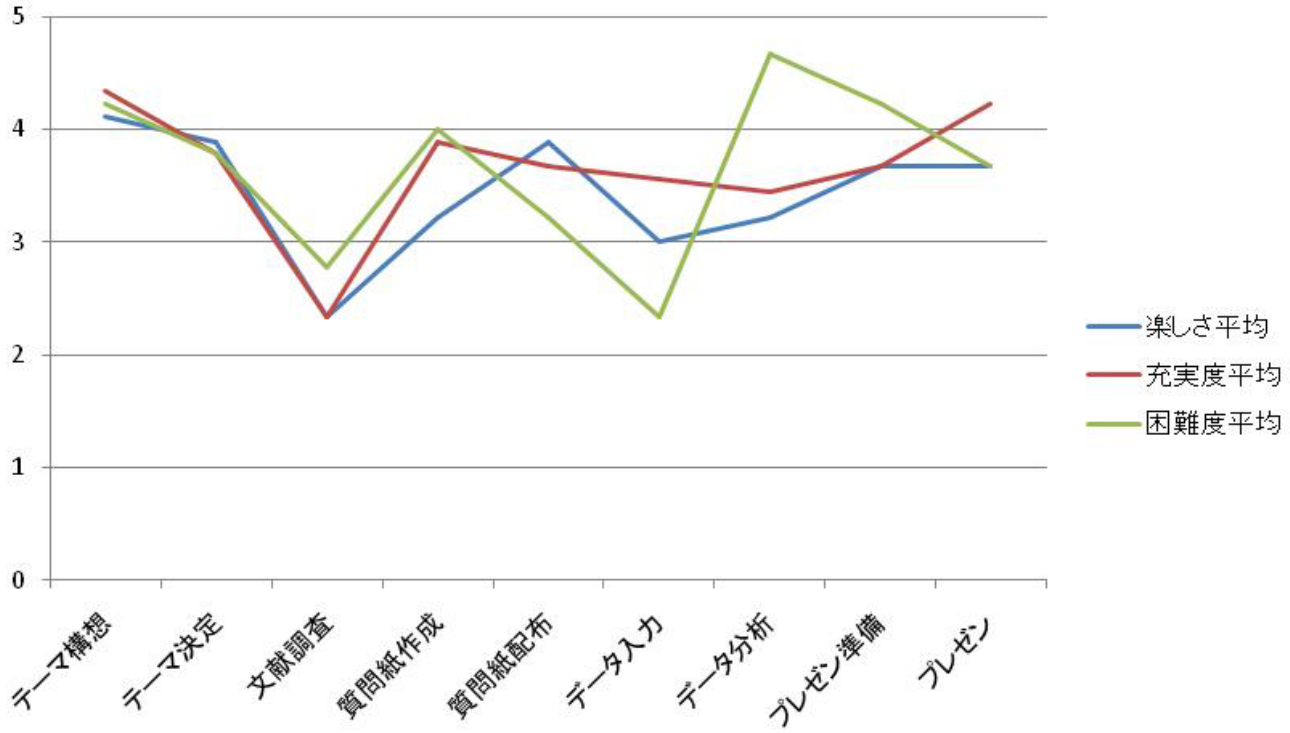

図１　授業の各フェイズを通した学生の主観的評定（平均値）の時系列的変遷